

ハイデガー『存在と時間』注解 (3)

寺 邑 昭 信

承前

あいかわらず木（の表面だけ）を見て、森を見ずの、そして遅々として進まない注解であるが、今回は、第七節の「A 現象という概念」および「B ログスという概念」を取り扱う。ただし紙幅の都合で、Bの一部についてはやむを得ず次回にまわした。なお訳文には適宜原語を付加してある。『存在と時間』引用文の下線、およびその他の引用文での太字は、従前どおりで原文での強調箇所を表す。ギリシャ語はカタカナで表記した。また新たに引用したハイデガーの著作については、次の省略記号を用いる。また特に断りのないかぎり、省略は筆者による。

Einführung in die Metaphysik 3.Auflage, 1966 = EiM

Vorträge und Aufsätze, 1954 = VA

これら二冊については、理想社版『ハイデッガー選集』の訳を引用させてもらった。また下記のリッケルトの『ログス誌』掲載論文は、RLSの省略記号を用いる。

H.Rickert, Die Methode der Philosophie und das Unmittelbare.Eine Problemstellung, in: Logos 1923/24, Bd.XII = RLS

注解

第七節のA、Bの内容には、全集第20巻『時間概念の歴史へのプロローグメナ』の111頁～116頁の叙述がほぼ対応しており、全集第20巻の記述のほうが、講義録のせいか簡潔である。また『存在と時間』のこの箇所ではアリス

トテレスへの言及は、Bの「ロゴスという概念」に見られるだけであるが、全集第17巻『現象学的研究入門』第一部第一章は「アリストテレスに遡っての「現象学」という表現の解明」と題され、そこでは自己示現が現象の原義であるとするファイノメノン理解、そして語ることによって顕わにすることとしてのロゴス理解が、主としてアリストテレスの『靈魂論』の解釈を手がかりとして詳述されている。

「A現象という概念」では、現象の形式的な定義が提示され、そのハイデガーが真正で根源的と見なす現象概念が、仮象、現われなど他の現象概念から峻別され、さらにそれらの現象概念が根源的な現象概念から派生したものであることが示される。

・028/27-028/29「だからファイノメノンとは、おのれを示す当のもの、自己示現するもの、あらわなものということである。ファイネスタイ自身は、白日にさらす、明るみに出すという意味のファイノーの中動相である。」

「おのれを示す当のもの」、「自己示現するもの」、「あらわなもの」の原語はそれぞれ *das, was sich zeigt, das Sichzeigende, das Offenbare* である。岩波版では、それぞれ「自分を示すところのもの」「自己示現者」「明らさまなもの」、またちくま版では、「おのれを示すもの」「現示されるもの」「あらわなもの」である。

中動相（中間相とも訳される）*das Mediale, middle* については、例えば田中美知太郎他著『ギリシャ語入門 改訂版』岩波全書137の以下の説明を参照のこと。

「中動相はある意味においてその名称の示すように、能動相と受動相との間の中間的な機能をもった相であるとも言えるが、その本来の意義はむしろ能動相である。ただ中動相には能動相の場合に比べて、動詞の表す動作がその主語に対して利害その他の点で何か特別に深い関係をもっている場合が多い。」（『ギリシャ語入門』52頁以下）同じ箇所では実例として（イ）自分のために・・・する、「使いをやって自分のところへ呼び寄せる」（ロ）再帰的、「自分の身体を洗う。」（ハ）相互的、「お互いに分かち合う」の意味の例文があげら

れている。

現在のドイツ語の祖語には中動相が残存していたというが (cf. 相良守峯著『ドイツ文法』岩波全書135, 39頁, 131頁) 現在のドイツ語は中動相を持たず、いわゆる再帰動詞が、中動相的な意味を表現している。そこで、何かを示すという意味の *zeigen* に自分を示す再帰代名詞の *sich* (自身を) が対象としてつけられて、ファイネスタイが、まず *sich zeigen* とドイツ語化されるのである。

・0028/29-028/31「ファイノーは、ファという語幹に属しているのであって、それは光、明るさ、言いかえれば、或るものがそのうちであらわになり、おのれ自身に即して看取されうるようになりうるものを意味するフォースが、この語幹に属しているのと同様である。」

ファ、フォース、光と現象の密接な連関については、全集第17巻6頁以下のアリストテレスの『靈魂論』解釈を参照。その第一節は「見るという仕方
で世界を知覚することについてのアリストテレスの分析に基づくファイノメ
ノンの解明」と題されており、この節はまた「a) 存在者の卓越した現前の
仕方としてのファイノメノン：昼間の現存在」および「b) 明るみあるいは
暗闇の中のそれ自身に即して自分を示しているあらゆるものとしてのファイ
ノメノン」に細分されている。たとえば以下の箇所を参照のこと。

「明るいものは、見えさせるものである。……明るさは、何かの現前性の如何に *Wie der Anwesenheit von* (パルーシア, エンテレケイア) である。」
(GA17/07f.)

「色は明るさの中で見られる。見られたものは白日のもとになければならない。明るさは、世界の存在自体に属しているような何かである。明るさは太陽の現前性である。このように現前していることは、それがそれ自身を貫き通して見えさせるという点に、その存在性格を持っている。……世界の中にある現存在には、太陽が現前していることが属しているのであり、それはまさに、われわれが、それは白日のもとに曝されていると確言するときに、意味しているものなのである。……ここから明らかになるのは、ファイノメノ

ンは、第一に存在者の現前性の卓越した仕方に他ならないということである。」(GA17/09)

「ファインメノンという概念は、昼間における諸物の現前に限定されるのではなく、この概念はもっと広いものであり、それが明るみにおいて自分を示すにせよあるいは暗闇において自分を示すにせよ、それ自身において自分を示しているような各々のものを表示する。」(GA17/10)

全集17巻でと同様、『存在と時間』でもファインメノンが、光、照明と関連づけて説明されていることは、興味深いことである。現象はたしかに、構成主観によって初めて構成されるようなものではなく、あくまで自分を自分から示しているものなのであるが、個々の現象が自分を示すためには、やはり先行する「光」、「明るみ」が必要なのである。そうした明るみは、やがて現存在の「現」によって示される開示性 *Erschlossenheit* として明らかになるであろう。『存在と時間』133頁以下では次のように述べられている。

「人間の内なる自然ノ光という存在的に比喩的な言い方は、人間というこの存在者はおのれの現であるという在り方において存在しているという、この存在者の実存論的・存在論的な構造以外の何ものをも意味していない。この存在者が「照明されている」とは、おのれ自身に即して世界—内—存在として明るくされているということ、つまり他の存在者によって明るくされているのではなく、おのれ自身が明るみであるというふうに明るくされているということ、このことにほかならない。実存論的にそのように明るくされている存在者にのみ、事物的存在者は、光のうちで近づきうるものになり、闇のうちでは秘匿されるのである。・・・現存在はおのれの開示性である。」(SZ S.133)

・028/31-028/33「だから「現象」という表現の意義として固執されなければならないのは、おのれをおのれ自身に即して示すもの、つまり、あらわなものということである。」

この箇所は、岩波版では「それゆえ、「現象」という表現の意義として、<自分を自分自身に示すもの>、明らさまなもの、が確認されねばなりません

ん。], またちくま版では「してみれば, 「現象」という言葉の意義として銘記しておくべきことは, 「ありのままにおのれを示すもの」…, 「あらわなもの」ということである。」とある。

「おのれをおのれ自身に即して示すもの」の原語は, *das Sich-an-ihm-selbst-zeigende* である。ファイノメノン¹は, 数行手前で, まず中動相的に「おのれを示すもの」*das Sichzeigende* とドイツ語化されたのだが, 今度はさらに *an-ihm-selbst* (彼自身に即して) が付加されて, あくまでおのれ自身をありのままに示すことであるという限定を受けたわけである。(ただし, 「B ログスの概念」で明らかになるように, ログスは, 「として」構造を持つために現象を視点なしに開示することはできないから, この現象の *an ihm* は, 実は単純に, あるいは全く「ありのままに」とは言えないことに注意。)

ところでこの *das sich an ihm selbst Zeigende* であるが, 普通の文法では, 再帰代名詞の三人称単数三格は, *sich* でなければならない。*Er zeigt sich an sich.* と *Er zeigt sich an ihm.* とでは, 意味が違うのである。(『存在と時間』の仏訳は二種類あるが, ベームとド・ヴェーレンス訳では *ce-qui-se-montreen-lui-même* であり, ヴザン訳では *le se-montrant-de-soi-même* となっている。前者の訳では「彼自身において」と原文に忠実であり, 後者の訳では「それ自身から (について)」である。) ハイデガーが, 「おのれに即して」を表すために, あえて「彼に即して」と表現しているのは, なぜだろうか。

これは一つの憶測に過ぎないが, *an sich* だと, 中動相のもつ自己再帰の意味合いが強くなりすぎて, 「現象」とはあたかも自己完結的なものと解されてしまう恐れがあるからではなかろうか。現象は, 「光」の中で, あくまで対他的におのれを示すのであり, (フッサールの志向性が, ノエシス, ノエマの不可分の構造をもっていたように) 見るものとの, つまり (すぐに明らかになるように) 見えさせる働きであるログスの機能と動的な相関関係にある。ハイデガーは, この他者であるログスに対する現象であることを示唆するために, ログス側の視点を予想させる *an ihm* を使用したのではなかろうか。中動相には相互関係を表す意味もあったわけだし。

・029/01「そうした自己示現をわれわれは仮象すると名づける。」

仮象する（岩波版では、仮相，ちくま版では仮象）と訳された動詞は *scheinen* であり，仮象と訳された名詞は *Schein* である。*scheinen* は，英語の *shine* と同語源で，（光を発して，反映して）「輝く」という原義と，「であるように見える，らしい」（英語の *seem*）という派生的意味の二通りの意味を持っている。また名詞 *Schein* は，これら二つの動詞の意味に応じて，「光，輝き」という意味と「外見，見せかけ，うわべ」という意味を持つ。哲学用語としては本質や実在に対する仮の姿を示すために用いられ，「仮象」と訳されてきた。さらに *Schein* の派生的な意味としては，「証明書」，そして「紙幣」（*Geldschein*）がある。本物の金貨，銀貨に対して紙に印刷されたお金は，見せかけのお金というわけだろうか。

（なおハイデガーは，1935年の講義をもとに53年に公刊された『形而上学入門』の「存在と仮象」の節で，ドイツ語の *Schein* の二種類の意味を取り上げ，検討し，シャインには（1）光輝と照り輝き，（2）現象，或るものがそこへと到来する現・前，（3）単なる見せかけとして，或るものが呈している外観という三通りの意味があり，二番目のシャイネンが「自己を示す」という意味の現象エアシャイヌングとして，（1）（2）の意味の根拠となっている，と述べている。（EiM S.75f.参照。）但し『存在と時間』の該当個所でのシャインは，あくまで（3）の意味に限定されているのである。）

ハイデガーは，この *Schein* という語を，この語の二つの意味のうち後者の意味合いで，つまり「自分を示してはいるのだが，自分自身に即してではなく示すもの」（SZ S.28）*sich als das zeigt, was es an ihm selbst nicht zeigt*, 自分を別様に示すものを指すものとして用いるのである。

・029/17-029/19「しかし，これら二つの術語が言いあらわすものは，「現われ」*Erscheinung* とか，それどころか「単なる現われ」と名づけられているものとは，差しあたっては全然なんらの関係もない。」

Erscheinung は，岩波版も同じく「現われ」。ちくま版は「ふつうに「現象」（*Erscheinung*）とか，まして「単なる現象」（*blasse Erscheinung*）と呼

ばれているもの」と訳し、この意味の現象は《現象》と表記して、本来の現象と区別している。

原語の *Erscheinung* は、*scheinen* の派生語 *erscheinen*（「姿を見せる、出現する」）の名詞である。*Erscheinung* には、「出現、現象、幻覚、外観、出版」などの意味があるが、日常のドイツ語では、文脈によっては多少ニュアンスの違いはあるものの *Phänomen* も *Erscheinung* も区別無く（前者は17世紀後半、後期ラテン語から借用されたもので、最初は哲学や自然科学で術語として使われたが）「現象」の意味で用いられているので、混乱が生じやすい。「ひとがこうした三つの異なった事態を「現われ」として表示するなら、混乱は避けられなくなる。」（SZ S.31）参照。

・029/36-029/37「現れることは、おのれを示すあるもの（＝現象・・・筆者挿入）を通じて、（間接的に・・・筆者挿入）おのれを告げることなのである。」

岩波版では「現れることは、自分を示す或るものによって、自分を告げ知らせることです。」、またちくま版では「《現象》は、おのれを示すものを介してほかのあるものがおのれを通示することである。」

原語は *das Sich-melden durch etwas, was sich zeigt.* である。*melden* は、もともとは「何かを漏らす、告げ口をする」という意味だったのが、15世紀以降、「伝達する」という意味に用いられるようになったという。何かを伝達するためには、伝達されるもの（直接体験される事態）を直接もたらすことは必要ないわけである。

ハイデガーは、ここで、上述の彼の現象の定義にかなう現象のみに *Phänomen* という言葉をあて、仮象をのぞくその他の現象、自分自身を示さず、自分自身を示す本来の現象を借りて自分を示唆するもの、すなわち自己示現ではなく間接的告知であるような現象には *Erscheinung* をあてて術語的な区別を行い、あくまで後者は前者を前提としていること、そして現象はあくまで自分を直示するものであることを強調するのである。

「現われや現われることにおける指示機能に特色的なのは、指標化する *Indizierung* という、つまり何かの告知 *Anzeige* という機能である。ところ

で何かを別の何かによって告知することは、まさに何かをそれ自身に即して示すことではなく、むしろ間接的に、媒介的に、シンボルによって表すことなのである。」(GA20/112) 参照のこと。

なお30年代以降、方法概念としての「現象学」という言葉は、姿を消してしまうのだが、それに呼応してフェノメンという言葉も背景に退き、エアシャイニングが『存在と時間』でいう現象フェノメンの意味で、つまり「真正の根源的な意味」での現象を指すものとして使われるので、注意が必要である。「シャインの本質はエアシャイネンにある。エアシャイネンとは自分を示すこと Sich-zeigen, 自分を現すこと、顕わに立っていること、現前に横たわることである。」(EiM S.76) 参照。

・030/08-030/11「ひとが現象を、「現れ」という、かてて加えて不明瞭な概念の助けをかりて定義づけるなら、一切が無茶苦茶になってしまい、だからこうした地盤にもとづいて現象学に対してなされる「批判」が奇妙な企てであることは、言うまでもないのである。」

「企て」の原語は *Unterfangen* であるが、この語は「大それた（無謀な企て）」というニュアンスがあり「冒険」などと訳されることがある。

この箇所には、全集第20巻の「現象学が批判される場合、ひとはまさに、自分に都合のよいものを、つまり「現われ」*Erscheinung* という概念を選んで、この言葉でもって事象的な探究を批判するのである。」(GA20/114f.) が対応している。

さてここで言われている「現象学に対してなされる「批判」」であるが、これは『存在と時間』では名指しされていないが、当時は講義録であった全集第20巻や全集第17巻の以下のような文を参照するならば、ハイデガーのかつての指導教授であったリッケルトの論文、『ロゴス』第12巻所収の「哲学の方法と直接的なもの——一つの問題提起」(*Logos.Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur. Bd.XII, 1923 / 24, S.235-280*) における「直接性の哲学」としての現象学批判を指していることが分かる。

「現象学に対する若干の典型的な誤解についてただ全く簡単に論じておきた

